

2021.4.15
山陽新聞

感染症流行社会考える

岡山大学動態学研究所開設記念 研究者らシンポジウム

岡山大学動態学研究所の開設記念シンポジウム「パンデミックと文明」が14日、同大津島キャンパス（岡山市北区津島中）で開かれた。国内の大学研究者が新型コロナウイルスやハンセン病といった感染症に関する講演などを行い、今後の社会の在り方について考えた。

基調講演した長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授が「人類が病原体を持つ動物を家畜所、松岡弘之講師は、

化し、人口が増えたこと、感染症の流行が恒常的に起こるようになった」と説明。重症急性呼吸器症候群（SARS）や新型コロナウイルスを挙げ、「近年の流行頻度は度を越している。（生態系に配慮しない）開発で人類と病原体を持つ動物の関係が変化しているためではないか」と述べた。

ハンセン病の国立療養所について研究する岡山大学動態学研究所の松岡弘之講師は、



感染症と人類の関わりについて考えたシンポジウム

同研究所は1日、津島キャンパス内で開所。シンポジウムは会場とオンラインを合わせ、研究者ら約150人が聴講した。（石井聡）

隔離と収容を進めた国の政策について報告。

同研究所の松本直子所長は、感染症の患者を差別してきた歴史に触れ「正しい知識や情報を共有し、差別を

生まない社会にしなければならない」と訴えた。